

長寿のサイエンス

中国伝統科学の思想史的考察



たけだときまさ
教授 武田時昌

1954年生、1985年、京都大学
大学院文学研究科博士後期課程
中退

科学技術の進歩は実に著しい。機械文明による社会生活の利便性は日々増進している。数十年前までのように伝染病で死亡する恐怖からも解放され、長く生きながらえるための環境と医療を手に入れている。だが、誤謬だらけの伝統科学しか知らなかった古代人よりも幸福であると実感しているだろうか、生を養うすぐれた知恵を持っていると自負できるであろうか。

科学研究の成果を求めようとするなら、伝統科学は過去の遺物にすぎない。しかし、科学知識として有効に作用していた学問的特質とその社会的背景を探っていけば、現代人が見失っている何かに気づくことがあるかもしれない。人類社会の将来において、伝統科学の復権があるならば、中国の科学文化の構造を究明し、その本質がどのようなものであったのかを思索しようとすることも、少しは意義のあることかもしれない。

科学技術史から科学思想史へ

自然科学の歴史を叙述しようとする、科学的成果の発明、発見を跡づける業績史と科学者列伝が中心的な話題となる。しかも、現代科学から見た真理が評価の基準になり、迷信や虚妄が絡みついている言説には擬似科学のレッテルを貼ってしまいがちである。伝統科学から近代科学への輝かしい発展を系譜づける目的ならば、それで十分かもしれない。

しかし、天才科学者のすぐれた知見が異端視され、ずっと後にならないと認められないことは稀なことではない。また、高度な理論書がすぐに世の人々に読まれるようになるわけでもない。近代化への道標ではなく、人々に生きる知恵として活用される科学知識にスポットを当てるならば、当時に信奉され、強く影響を及ぼしていた「サイエンス」は今日から見た伝統科学とは別物であるかもしれない。

科学史、技術史も広義の歴史学の一翼であるという視座で捉えれば、科学理論の構造を明らかにすると同時に、それを生み出した社会的、思想的な背景を明らかにし、社会にどのように浸透していったかを考察す

る必要があるように思われる。

中国科学史で言えば、藪内清、ジョセフ・ニーダム両博士を中心に究明してきた科学技術史から科学思想史、科学文化史、あるいは東アジア比較科学史へと転換させていくべき時期に来ているのである。

黎明期の科学書の大発見

中国科学の基礎が形成されたのは、漢代である。数学では『九章算術』、医学では『黄帝内経』、本草学では『神農本草経』等々、各分野で基礎となる著作が編纂された。その水準はきわめて高く、他の文明圏よりも自然科学が発達していたと言っても過言ではない。

しかし、それらの著作には、大きな謎がある。何時、何処で、誰によって編纂されたのかまったくわかっていないのである。それらの著作は、いずれもそれまでの研究を集大成した感がある。ところが、史書にはそうした試みやそれに関わった研究者集団の存在はほとんど語られておらず、書物だけが前漢末から後漢初にかけて忽然と姿を現す。

とりわけ『黄帝内経』の場合は、後続の医書と比較すると、さらに疑問は深まる。理論体系的記述は、羅列的、実用的になり、大きな落差がある。内経医学の理論構造は、漢代に流行した陰陽五行説を複合的に応用した難解なものである。これを基礎理論として学び、臨床の現場に応用しようとするのは至難の業であっただろう。だから、中国医学は『黄帝内経』の編纂から確かにスタートするものの、これと比肩する理論書は二度と著されることはなく、むしろ『黄帝内経』を最終的な到達点とする回帰曲線を描いているのである。

前漢と後漢の間は、王莽が政権を篡奪して、新王朝を樹立した悪名高き時代であるから、文化的な事績が史書から抹殺された可能性は十分にある。思想界でも原始儒家思想が経学を中心とする総合学術的な政治思想へと成長する大変革が進行していた。だから、自然科学の分野でもいわゆる科学革命と呼べるような大いなる飛躍があったのかもしれない。

しかしながら、漢代を顕彰するあまりに、それ以前は未発達な時代であるとし、三国時代以降の流れについても実用科学への傾斜で理解してしまうのは早計である。

というのも、1973年に長沙馬王堆漢墓から、1984年に江陵張家山漢墓から、多種の科学書が出土し、黎明期の科学を探る資料が得られたからである。

発見された書物は、数学では『算数書』、天文暦学では『五星占』『天文気象雑占』、医学では『足臂十一脈灸経』『陰陽十一脈灸経』、本草学では『五十二病方』等々であり、導引行気や房中術等の養生書も多数含まれていた。それらは漢代の基礎理論書の前身であり、中国科学の起源と形成に新しい証言が得られた。

『黄帝内経』について言えば、経脈篇で述べる十二経脈説は、出土した灸経の十一脈説を加筆したものであることがわかった。つまり、内経医学の針療法の基本である経脈と経穴は、灸療法の理論を借用し、改変したものであることが明らかなのである。そのことを指摘するだけでも、これまでの定説を覆し、再考を促す衝撃的な大発見であったことが理解できるだろう。

生を養う古代人の知恵

科学知識の伝播と世俗化という視点で見れば、新出土資料に、三国時代以降の著作に受け継がれた言説が多数存在することも大いに注目すべきである。漢代の著作の特異性を再検討し、先秦から漢初と三国時代以降の科学文化の連続性を議論する必要があるのである。

養生術関連の書物にはその傾向が強く見受けられる。養生思想とは、心身の健康を増進して長生きを達成するための技法、生き方を探究するものであるが、その思想的ルーツは老子の自然哲学にある。

老子は、文明社会に背を向ける「無の哲学」で知られているが、同時に人生最大の価値を天寿を全うすること見出し、身を損なう人為的営為を斥け、自然の中でありのままに生きる「生の哲学」を唱えた。そして、その弟子に長生術を実践的に追求する一派が分岐した。

先秦の養生思想については開祖とされた彭祖の伝説が語られるだけであった。ところが、新出土資料の内容を吟味すると、後漢末に成立した道教の発展過程で登場する丹薬服用（外丹）や瞑想（内丹）の様々な身体技法は、姿を変えているものの、基本的なアイデアと理論の骨子は先秦時代に確立していたことがはっき



馬王堆漢墓出土「導引図」の一部。後漢末の名医華陀が考案したとされる五禽戯の原始的な姿も描かれている。添え書きから疾病の療法にも応用したことがわかる。

りした。しかも内経医学成立以前の医学理論と身体観を基盤にしたものであった。つまり、生を養う古代人の知恵は、本質的には変容することなく、ずっと後世まで時を超えて綿々と語り継がれていたのである。

貝原益軒の『養生訓』を例に挙げればわかるように、養生書の特色として、日常生活を健康に暮らすための便利な手引き書であるから、新しい科学的知見に富んでいるというよりも、内容は啓蒙的、通俗的である。したがって、これまで科学史の研究対象としては脇に置かれていたが、人々に医学知識を伝達するうえでは大きな役割を果たしたことを見逃してはならない。しかも、健康の維持や長寿の達成には医学、薬学の知識だけではなく、文化的行為全般にわたって幅広い思索を必要とし、生きていくための知恵に結集させようとする方向性を持っている。

科学知識と文学、芸術、哲学の精華との統合は、細分化しがちな学問の弱点を補完するものであり、サイエンスがめざすべき理想がそこにある。しかし、口で言うほど生やさしくはなく、今日でも長寿のサイエンスと呼べるものはまだ成立していない。その実現を希求するならば、時を超えて受け継がれてきた古代人の叡智に大いに学ぶべきものがあるように思われる。